4398　地球のかおり：「秘境の湖水」（産経新聞）心模様

広大なオーストラリア、西に位置するパースから、北上。
野生のイルカがやってくる観光地、モンキーマイヤへは、パースから、900 キロ。
京都から東京まで、約 500 キロ。
モンキーまいあーから、ノースウエスト岬の、エクスマウスまでは、
500 キロ以上あるだろう。今回は、ダーウィンをめざすたび、**片道 4.800 キロ**。

エクスマウスから、進路を東方向に、グレートサンディ砂漠を、右に見て、
ブルームの街を通過、キンバリー高原に。
このキンバリー高原でも、危険な状況に遭遇、その話は、後日。
そして、カナナラへ。道は、ダーウィンへとつづく。
地図上には、湖水らしいものは、全くない。辺境そのもの。
見渡す限り、広大な荒野。内陸に足を踏み入れると、赤土道がつづく。
山も見あたらない。低いブッシュが目につく。私が訪ねたのは、**乾季**だった。

灼熱の炎天下、肌が、じりじり焼ける。真っ黒になっていた。
きっと、シミになって残るだろう。肌を刺す暑さ。
木の陰が愛おしい。風もない。無風。
喉の渇きを、癒すものは、何もない。頼りになるのは、携帯してきた水。
水の有難さを、心から痛感。荷物もあることから、レンタカーでの移動、ひとり旅。
臆病な私は、万一を考えて、必要以上のものを車に、ほり込んでいる。
覚悟しての、旅立ちだった。

ガソリンスタンドは、400 キロ離れている。午後 3 時か、 4 時には閉店。
なにしろ、人もいない。車も、ほとんど通らない。商売にならない。
まさに、秘境と呼べる領域。遭難や、行方不明になる人が多いと聞く。まさに、私は、冒険者。
無謀な旅に出てきたのではないか、と、後悔の念も、脳裏に走る始末。
強い心と、弱い心が葛藤する。
一直線につづく赤土道、一直線につづく海岸線。
最初は珍しく、感動と充実感に満ちて、満足そのものだった。

やがて、広大さに、恐怖と、不安感がつのる。
行けども、行けども同じ景観。これは困る。旅のスタイルは、ひとり旅。
確かなもの、頼れるのは、自分自身だけかもしれない。
果たして、頼れるものがあるだろうか？

私は、ここに、**何しに来たのか**。特に、目的は持たない。
しいて言えば、素敵な光景に会いたい、いや、自分を試すため。
自分探しもあるだろうが、厳しい状況に、我が身を置いて、どんな考動をとるかを試す。
そんな思いが、心の底にある。
せめて、素敵な景観くらい、しかし、なかなか、希望を、かなえてくれない。
のどが渇く。肌も、ヒリヒリ感を、通り超している。
長くつづく、美しい海岸線や、大海原の感激も、今は、単調に感じる。
対比する、比べる対象がないと、わからない。
海水にも嫌気。うっかり含むと、後遺症になる。塩の辛さは、並ではない。

内陸に入ると赤土道。低いブッシュがある。動物の死骸も、ころがっている。
草むらに入ると、補色の、見たこともない小動物が出現する。
例えば、トカゲ。日本で見る、トカゲとは違う。色も、大きさも違う。
最初は、びっくり。襲ってくる気配はない。少し安心。
文句も愚痴も言いたくなる。
しかし、楽しいこともある。それは、夕暮れに出没するカンガルーの家族の歓迎。
なんともユーモラスな仕草というか表情。
怖いもの見たさというか、それとも・・・　　一定の距離感が、保たれている。
しばし、心が、なごまされる。

ふと、脳裏に、今夜の宿は、見つかるだろうか。
道草を楽しみながらのひとり旅。車の旅、夏なので何とかなるだろう。
知らぬが仏。**夜道の走行は危険**。**動物との衝突**がある。
この暑さに、車も、たまったものではない。車も、この暑さには、閉口しているに違いない。
相棒の車が、ダウンすれば、私もダウンする。休ませてやらないと駄目。
旅立ち前に、そんなことを考えていたら、躊躇して、出発すらできなかっただろう。
単身の、無謀な旅。今となっては、思い切って、訪ねて良かった。

人様にできない、貴重な体験が積み重なった。気づきや発見、そいて、学び。

こうした辺境への旅には、頼りになるものが少ない。

しいて言うなら、積み重ねてきた、自分自身。その基本以外に、不可欠なものがある。

車や食料、水、役立ってくれる道具、ものへの感謝。

あれこれ考えながら、旅のリズムや、心の平常心を保つ努力が大変。

今、コロナ問題。平常心や、生活のリズム、リスク回避やストレスのなだめ方、等々

先が見えない問題が山積。自分から、窮地を招かないように、私も、今、格闘中。

まず、大切なのは、体と心と呼吸を整え、落ち着くこと。

言うのはやさしいが、実践が難しい。思い通りにいかず、四苦八苦、負ける訳には行かない。

話を元に戻して、そして、突然、出会った砂漠の中の、オアシスのような湖水。

枯れかけた、木々さえ、愛おしく感じた。

水は、目にも、心にも、やさしい。見ているだけで、心が癒される。

湖面は、鏡のごとし。風もまったくない状況。水面(みずも)は、微動だにしない。

色彩も、吸い込まれるような、深いダークブルー。

この湖水、どこから流れてきたのか。

見渡す限りの荒野、山もない。川も見あたらない。

人が住んでいるような状況にはない。

地球の不思議、天の恵み、雨水だろうか、それとも地下水？

思いを、めぐらす、ひととき。

目にするものが、無味乾燥のものばかりだった。

ブッシュすら、いとおしい。木まである。どうして、という疑問が強くなった。

この水は、どこから来て、どこに行くのか、天に昇るのか。

この湖水との会話、なにしろ誰もいない。

この湖水に、心を奪われたのは言うまでもない。見れば見るほど不思議。

その時、そう感じた。

水に恵まれた日本。日常、なんとも思わないことが多い。

水は、当たり前のものとしてある。水量も豊富。透明な流水。恵まれた自然。

眼前の湖水、それだけに、印象強く残る存在だった。

誘惑。水の中へと思った。なぜか、思いとどまった。
水の色からも、深いに違いない。不思議な湖水と、言わざるをえない。
底深い沼かもしれない。そんな想像、思いが脳裏に。
臆病は、勇気でもある。匹夫の勇は、困る。

以前、カナダの山奥の湖水、水辺にたどり着こうとして、
草をかき分けて、近づいた時、肌が、かぶれた経験がある。未知の地での出来事。
その後、かぶれがひどくなって、困った体験がある。
人生は、選択と決断の繰り返し。大げさだが、ここは、引き下がるのが賢明。
見ているだけで、癒された。立ち去りがたい思い。
炎天下の道中だった、だけに、心の癒しが、倍加される。

喜びとは、感動とは？　やはり、**楽ばかりしていては、得られない。**
坂道を、汗をかきながら、悪戦苦闘。峠に達してこそ、素晴らしい景観との出会いがある。
そして、深い感動が、生まれるのかもしれない。喜怒哀楽しかり。
なんでもない、たかが、湖水の一つ。沼ではないか。
その時の私には、**天国**に見えた。**昔、ものはなかった。**しかし、皆、元気だった。
今、ものは、いっぱいある。しかし、皆元気だろうか、幸せだろうか。
今、目が輝いている人が、少ないように思える。

思い切って、こうした、辺境への、ひとり旅が出来て、良かった。
人間に内在する力を、自然や、試練は、引き出してくれる。
考え方や価値観、違いが見えてくる。
自分の内奥にも、気づきがあった。訪ねて良かった。人生再点検の旅。
自分探しのひとり旅、自分を試す、辺境へのひとり旅。
いいことも、そうでないことも、**そうでないことが多い**が、自分を再発見できたのが、嬉しい。
この旅も、なんでもない湖水との遭遇で、意義深い旅になった。

この旅、このあとも、試練がつづいた。
厳しかった道中を、無事、やり過ごすと、いい思い出に変わる。
しかし、大切なのは、今。未来につづく、今に全力投球。